



Title	名詞補語de NPのen化と生成文法
Author(s)	大木, 充
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 3, p. 55-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80044
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

名詞補語 de NP の *en* 化と生成文法

大 木 充

Sur la syntaxe de 《*en* génitif》 et la grammaire générative

Mitsuru OHKI

Dans le présent article, je voudrais simplement montrer que l'analyse purement formelle ou structurale de Couquaux (1979, 1980, 1981), dans le cadre de la grammaire générative, du clitique *en* 《issu du sujet》 ne rend pas bien compte de l'inacceptabilité de quelques phrases. On a, par exemple, (1) et (3), mais non (2) et (4):

- (1) La confirmation *en* est arrivée à cinq heures.
- (2) *L'auteur *en* est arrivé à cinq heures.
- (3) L'usage s'*en* est progressivement perdu.
- (4) *L'auteur s'*en* est perdu dans la forêt.
- (5) L'auteur *en* est très connu.
- (6) Tu *en* connais l'auteur ?

Etant donné que le clitique *en* ne réclame pas toujours la tête non-humaine, comme le montrent (5) et (6), les exemples mentionnés ci-dessus pourraient remettre en question l'hypothèse de Couquaux. En fait, La cliticisation *en* est prédite par le degré de la transitivité de la phrase dans le sens de Hopper and Thompson (1980). Voir Ohki (1990).

0. はじめに

En のさまざまな用法のなかで、本稿で考察するのは次の例に見られるような en についてである。

- (1) a) La préface de ce livre est trop flatteuse.
- b) La préface en est trop flatteuse.
- (2) a) J'ai lu la préface de ce livre.
- b) J'en ai lu la préface.

また、本稿では en と関係づけられる名詞句が不定冠詞、部分冠詞、数詞でマークされている場合は扱わない。そして、議論の中心になるのは (1) のような場合で、en が主語名詞句と関係づけて解釈される場合である。大木 (1990) で、主語名詞句と関係づけられる en 化が可能なのは文全体の他動性が低い場合であることをくわしく考察したので、ここでそのことをもう一度説明することはしない。また、en 化の談話上の制約についても大木 (1990) ですでに論じたので、ここでは言及しない。

Couquaux (1981) は NP-V-AP の構造を持ち、V が、être, sembler, paraître, demeurer, rester, montrer, se révéler, se trouver, s'avérer, avoir l'air であるような文を《phrase prédicative》と呼び、このような文は次のような深層構造から派生されると考えている。

- (3) [[NP ^e] [VP V NP AP]]

そして、彼によれば、en 化が可能なのはこのような構文からのみであって、(4) のような構造を持つ文の場合には en 化は出来ない。

- (4) [NP [VP V AP]]

- (5) La porte en (= du garage) est ouverte. (= 51)
- (6) ?La couverture en (= de ce livre) jaunit au soleil. (= 42. b)
- (7) *L'auteur en (= de ce livre) espère devenir célèbre. (= 44. b)

(1)、(5) は (3) のような構造をしているのに対して、(6)、(7) はそのような構造をしていない。

Couquaux (1979)、(1980) では、受動文、運動動詞 (venir, arriver, monter, etc.)、出現動詞 (paraître, apparaître, se perdre, s'effacer, etc.)、存在動詞 (exister, etc.) を持つ文も (3) のような V-S 構造から派生されるものと考えられている。Burzio (1981) も、彼が《ergative》と呼ぶ動詞クラスに関して、Couquaux が考えたのと同様の D 構造を持つと仮定している。そして、この仮定によってフランス語の en に相当するイタリア語の ne の出現をうまく説明できるとしている。

このような考え (Perlmutter (1978) にしたがって、便宜上このような考えを「反・対格仮説」と呼ぶことにする) に対して、Bouchard (1987) はいくつかの問題点を指摘している。以下の節では、Bouchard の批判の不十分な点を指摘しつつ、en 化を反・対格仮説と関連づけて説明することの問題点について述べたい⁽¹⁾。

1. 反・対格動詞構文における en 化

En を含む反・対格動詞構文の文に対するインフォーマントの評価は高い⁽²⁾⁽³⁾。

- (1) La confirmation en (= de cette nouvelle) est arrivée à cinq heures.

(++) bh (+) adeg (0) cf (-) (--)

- (2) Le prix en (= du lingot) est monté jusqu'à dix millions.

(++) begh (+) adf (0) (-) (--) c

しかし、同じ反・対格動詞の次の文の評価は高くない。

- (3) L'auteur en (= de ce livre) est arrivé à cinq heures.

(++) (+) (0) e (-) d (--) abcfgh

- (4) L'auteur en (= de ce crime) est monté jusqu'au dernier étage.

(++) (+) de (0) h (-) (--) abcfg

上例 (1)、(2) の容認可能性と (3)、(4) のそれとを比較してみると、明らかに後者のほうが評価が低い。Kupferman のように、NP1 de NP2 におけるそれぞれの NP の意味、NP1 と NP2 との論理的関係などによって、de NP2 そのものの en 化の難易が異なる⁽⁴⁾。それで、(3)、(4) の容認可能性が (1)、(2) のそれに比べて低くなっているのは、このことを考慮にいれなければならない。

しかし、NP1 de NP2 の NP1 が [human] のときには、いつも en 化できないというわけではない。このことは、主語の場合ではないが、次の引用例をみれば明らかである。

- (5) «Ceci ne vous étonne pas? ... Des années durant, je n'ai jamais entendu parler de chien jaune ... Vendredi un drame éclate ... Un de mes amis en est la victime ... (Geroges Simenon: *Le chien jaune*, p. 122)

- (6) Si la pauvreté est la mère des crimes, le défaut d'esprit en est le père. (La Bruyère: *Les Caractères*)

- (7) La diligence s'arrêta au croisement de deux pauvres chemins, devant un vieux poteau. J'en étais le seul voyageur. (Henri Bosco: *Malicroix*, p. 17)

さらに、(3)、(4) の評価の低いのは、単にこれらの文の de NP そのものの en 化の難易のみが関係しているのではないことは、次の例をみればわかる。

- (8) L'auteur en (= de ce livre) est très connu.

(++) be (+) acfgh (0) (-) d (--)

例文 (3)、(4) と (8) の容認可能性の相違は動詞句が関与していることは明らかである。

また、(1) と (3) の容認可能性の相違、(2) と (4) のそれは主語の名詞句が関与していることも明らかである。したがって、en 化の可能性を考察するには、動詞句のみならず、名詞句も含めた文全体の構成要素を問題にしなければならないといえる。この事実から、動詞のみを問題にしている反・対格仮説が不十分なことはすでに予想できる。

(1)～(4) の例文の主語をみると、(3)、(4) のそれが [human] であるのに対して、(1)、(2) のそれは [inanimate] である。この相違が en 化された文の評価の相違に関係しているものと思われる。Givón (1984 : 107) は次のような動作主性のスケールを考えている。

(9) Agentivity scale

- a. Humanity: human > animate > inanimate > abstract
- b. Causation: directe cause > indirect cause > non-cause
- c. Volition: strong intent > weak intent > non-voluntary
- d. Control: clear control > weak control > non control
- e. Saliency: very obvious/salient > less obvious/salient > unobvious/nonsalient

例文 (3)、(4) の主語は [human] で、かつ Volition、Control を持っている、それに対して (1)、(2) のそれは [inanimate] であり、Volition、Control を持っていない。例文 (3)、(4) の主語のほうが、明らかに動作主性が高く、文全体に関してはその他動性が (1)、(2) より高いといえる。したがって、(3)、(4) の容認可能性が (1)、(2) のそれより低いのは、(3)、(4) の文の他動性が高いのに対して、(1)、(2) のそれは低いからだと考えることができる。

反・対格仮説の枠組では、en 化できる動詞とそうでない動詞とではそれぞれ別の D 構造を持っていると考えている。しかし、(1)～(4) のような場合には、同じ動詞で en 化に対して文によって容認可能性が異なるので、一つの動詞に二つの異なった D 構造を考えなければいけないことになってしまう。

2. 代名動詞構文における en 化

Bouchard (1987 : 36, 42-44) は、Morin (1981 : 96) に従って、代名動詞の構文において en 化が可能なのは、いわゆる se-moyen の用法と neutre の用法であり、再帰的用法と相互的用法の場合には en 化はできないとしている。

- (1) Ce veston, la doublure s'en lave en dix minutes. (= 15)
- (2) Le bruit s'en est vite répandu. (= 16)
- (3) *Quand l'auteur (de LSLT) s'en regarde dans la glace le matin, à quoi pense-t-il?
(= 13)

確かに、インフォーマントに対するアンケート調査の結果も再帰的用法の場合には en 化できないことを示している。

- (4) L'auteur s'en(= de ce livre) est tué en se tirant une balle dans la tête.
(++) (+) (0) (-) a (--) bcdefgh
- (5) L'auteur s'en(= de ce livre) est arrêté.
(++) (+) (0) (-) d (--) abcefg

助動詞が être であるにもかかわらず en 化できないので、このような例は Burzio (1981) に対

してはやっかいな問題となる。そこで、Bouchard (1987: 44) は属格名詞句の en 化はまず常に可能であるとしておいて、表層にいたる段階でさまざまな制限をくわえることを提案している。

2.1.

実際には、再帰的用法、相互的用法とみなすことができず、se-moyen の用法、neutre の用法と考えられる代名動詞の構文においても en 化が不可能なことがある。

- (6) Le bras droit s'en(= de la statue) casse facilement.
 (++) (+) (0) (-) be (--) acdfgh
- (7) Le bras droit s'en(= de la statue) est cassé facilement.
 (++) (+) d (0) e (-) abg (--) cfh
- (8) La porte s'en(= du garage) ouvre facilement.
 (++) (+) ad (0) befg (-) h (--) c
- (9) La porte s'en(= du garage) est ouverte facilement.
 (++) (+) d (0) abeg (-) fh (--) c

なお、Morin (1981: 96-97) のあげた例も同じ方法でインフォーマントにアンケート調査してみた。

- (10) L'usage s'en(= de l'hospitalité) est progressivement perdu. (= 1. c)
 (++) bfh (+) cdeg (0) a (-) (--)
- (11) Le bruit s'en(= de son évation de la prison de Versailles) est vite répandu.
 (= 2. a)
 (++) bdefgh (+) ac (0) (-) (--)
- (12) Le dénouement s'en(= de cette affaire) devine déjà. (= 2. b)
 (++) f (+) abdeg (0) (-) h (--)
- (13) Le besoin ne s'en(= de ces documents) fait pas sentir. (= 2. d)
 (++) fgh (+) abcde (0) (-) (--)
- (14) L'usage ne s'en(= de la force militaire) imposait pas vraiment. (= 2. e)
 (++) bf (+) adeg (0) (-) (--) c
- (15) A mesure que la déclinaison disparaît et que le souvenir même s'en efface. (= 2. f)
 (++) bdfgh (+) ae (0) (-) (--) c
- (16) La nouvelle s'en(= de cet accident) est ébruitée. (= 2. g)
 (++) bh (+) adeg (0) (-) f (--) c

上例 (6) ~ (9) の容認可能性と (10) ~ (16) のそれとを比較してみると、明らかに後者のほうが評価が高い。(6) ~ (9) の評価の低さがこれらの文の de NP そのものの en 化の難易と直接関係しているのでないことは次の例をみればわかる⁽⁵⁾。

- (17) Le bras droit en(= de la statue) est cassé.
 (++) bdh (+) ace (0) fg (-) (--)
- (18) Le bras droit en(= de la statue) a été cassé.
 (++) bd (+) aeh (0) fg (-) (--) c
- (19) La porte en(= de la maison) est solide.
 (++) bce (+) (0) adfg (-) (--)

例文 (6) ～ (16) の主語をみてみると、(6) ～ (9) のそれが具体的な意味を表す名詞であるのに対して、(10) ～ (16) のそれは抽象的な意味を表す名詞である。この相違が en 化された文の評価の相違に関係しているものと思われる。Hopper & Thompson (1980 : 252-253) によれば、[human, animate] な patient のほうが [abstract] な patient に比べて、より INDIVIDUATION の程度が高い。そして、INDIVIDUATION の程度の高い patient を持つ文のほうがより他動性が高い。(6) ～ (9) の文の容認可能性が (10) ～ (16) のそれより低いのは、(6) ～ (9) の文の他動性が高いのに対して、(10) ～ (16) のそれは低いからだと考えることができる。

反・対格仮説の枠組では、en 化できる代名動詞の用法とそうでない用法とにそれぞれ別の D 構造を仮定すれば、それで、上の問題は解決できると考えるかも知れない。しかし、このように考えても、次の節で述べるような問題が残る。

2.2

同じ代名動詞がそれが用いられている文によって異なった用法に分類されることがある。

- (20) Cette branche s'est cassée pendant la tempête. (= 5, 春木, 1986, 66)

- (21) Ce type de branche se casse d'une seule main. (= 6, ibid.)

(20) の se casser は neutre な用法であり、(21) のそれは se-moyen である。春木 (1986)、荒井 (1987)、(1988) で一部問題にされたように、代名動詞のさまざまな用法の分類は結局文全体の中で考えるべき性質の問題で、その際に文全体の構成要素も対象にする他動性が当然大きな役割を担っているものと思われる。例えば、他動性の高い文で用いられている代名動詞は再帰的用法であり、逆に他動性の低い文で用いられている代名動詞は neutre の用法であると考えられることができるであろう。それで、同じひとつの代名動詞がその用いられている文によって異なった用法に分類されることになるものと思われる。さらに、それぞれの用法の境目は明確でなく、それぞれの用法は連続しているものと思われる。次の (22) の代名動詞 se perdre は neutre もしくは se-moyen の用法であり、(23) は再帰的もしくは neutre の用法と考えることができる⁽⁶⁾。

- (22) L'usage de l'hospitalité s'est perdu.

- (23) L'auteur de ce crime s'est perdu dans la forêt.

少なくとも、(22) のほうが、(23) よりも neutre の用法のプロトタイプにより近いと考えることができる。いずれにしても、(6) ～ (16) の例文について述べたのと同じ理由により (22) のは

うが (23) より他動性の低い文である。したがって、それぞれの文の de NP を en 化すれば、(22) のほうが (23) よりも評価の高い文になるはずである。

(24) L'usage s'en est perdu.

(++) beh (+) cdfg (0) a (-) (--)

(25) L'auteur s'en est perdu dans la forêt.

(++) (+) (0) (-) d (--) abcefg

われわれの予測どおり、(24) は容認可能性の非常に高い文であり、(25) は容認可能性が非常に低い文である。

反・対格仮説のように、en 化の可能な文とそうでない文とにそれぞれ別の構造を想定すれば、(1) ～ (5) のような場合にはうまく説明できる。ところが、同じ動詞で en 化に対して文によって容認可能性が異なる場合には、一つの動詞に二つの異なった構造を考えなければいけないことになる。

3. 助動詞 avoir 構文における en 化

Morin (1981 : 97-98) によって指摘されたように、助動詞に avoir をとる動詞の構文においても en 化が可能な場合がある。彼のあげたすべての例文をインフォーマントにアンケート調査してみた。

(1) Ce n'est pas l'envie qui m'en(= de le faire) manque. (= 3. a)

(++) bdefgh (+) ac (0) (-) (--)

(2) Si l'envie t'en(= d'aller à la campagne) prend, fais-moi signe. (= 3. b)

(++) bdefgh (+) a (0) (-) (--)

(3) L'envie m'en(= d'aller à la campagne) démangeait vraiment. (= 3. c)

(++) b (+) adeg (0) h (-) cf (--)

(4) Rien que l'idée m'en(= de le revoir) dégoûte. (= 3. d)

(++) g (+) adf (0) (-) ce (--) bh

(5) L'idée m'en(= de le revoir) plaît assez. (= 3. e)

(++) beg (+) d (0) (-) a (--) cf

(6) L'idée ne m'en(=de le revoir) sourit guère. (= 3. f)

(++) deg (+) a (0) cf (-) b (--)

(7) Rien n'en a encore transpiré. (= 3. g)

(++) bcd fgh (+) e (0) (-) (--)

(8) La nouvelle n'en(= de cet accident) a pas encore filtré. (= 3. h)

(++) bdgh (+) ae (0) (-) (--) cf

調査の結果はすべて容認可能な文であることを示している。

3.1.

Bouchard (1987 : 45-47) は、Morin の例が間接目的語をとっていることに着目して、次のような構造から派生されるものとする。

(9) $\triangle$ V NP1 à NP2

このように考えれば、確かに en 化をうまく説明することができる。しかし、彼自身が指摘しているように、他の反・対格構造を持つ動詞の場合とは異なり、この場合にはなぜ助動詞が *être* ではなくて *avoir* なのかという大きな問題が残る。さらに、*dégoûter* は (10) が示しているように

(10) Ces programmes dégoûtent les gens de la télévision.

直接目的をとる動詞であるので、(9) のような構造を仮定すると、別の解決しなければならない問題が新たに生じることになる⁽⁷⁾。

3.2.

この構文においても、これまでと同様主語が [human] になると容認可能性が低くなる。

(11) L'auteur m'en(= de ce livre) dégoûte.

(++) (+) e (0) d (-) (--) abcfgh

(12) L'auteur m'en(= de ce livre) plaît assez.

(++) g (+) h (0) de (-) (--) abcf

この事実もこれまでと同じように、反・対格構造を仮定する枠組ではうまく解決できない問題となる。

評価の高い (1) ~ (8) の例をみても、他動性の低い文であることがわかる。まず、主語は [abstract] で、[non-voluntary]、[non control] であり、AGENCY が低い。(1) ~ (6) の動詞に関しては、[non-action] であり、KINESIS も低く、また、目的語も [O not affected] であり、AFFECTEDNESS OF O も低い。(11)、(12) の文の主語は [human] で AGENCY が高く、したがって文全体の他動性も高い。(1) ~ (8) の文の容認可能性が高いのは、このように他動性が低いからであり、また (11)、(12) の文の容認可能性が低いのは、このように他動性が高いからであると考えることができる。

4. 結 論

これまで Couquaux (1979)、(1980)、(1981) および Burzio (1981) の反・対格仮説に基づく en 化の説明の問題点、彼らの考えに対する Bouchard (1987) による批判の不十分な点などを考察してきた。Couquaux、Burzio は en 化できる動詞とそうでない動詞とではそれぞれ別の D 構造を持っていると考えている。一方、同じ動詞でも、その使われている文によって en 化の容認可能性が異なる場合があった。このような場合を反・対格仮説の枠組内で説明するには二つの可能性が考えられるであろう。そのひとつは、同じ一つの動詞が二つの異なる D 構造を持ってい

るとする考えである。つまり、一つの動詞に対して、en 化のできる場合は反・対格構造をしていて、できない場合はそのような構造をしていないと考える。この考えは ad hoc であり、妥当な考えとは思えない。もうひとつの考えは、一つの動詞には一つの D 構造しかないと考え、それで容認可能性の低い en 化が派生された場合には表層にいたる段階で制限する方法である。その場合の制約とは、文全体の他動性に関係しているものになるであろう。

＊ この論文を書くにあたり、筆者の疑問に答えてくださった荒井文雄氏、Kupferman の発表について教えてくださり、貴重な助言をしてくださった木下光一先生に感謝致します。

また、面倒なアンケート調査に協力してくださった、フランス人インフォーマント Jean-Noël Bolot, André Geymont, Ghislaine Gerbier, Cécile Andrieu Kawakami, Corinne Jacquet, Christine Lamarre, Eveline Nakamura, Nicolas Ruwet の皆さんに厚くお礼申し上げます。

[注]

- (1) 本稿では en と関係づけられる名詞句が不定冠詞、部分冠詞、数詞でマークされている場合は扱わないので、Bouchard が Couquaux などの説を批判している第一の問題点についてはふれない。
- (2) 本稿で扱っている問題の性質上、複数のインフォーマントにアンケートを試みた。アンケート用紙の表紙には次のような回答要領を書いていた。

Veuillez lire les phrases suivantes et indiquer
si chaque phrase vous semble naturelle ou non :

- ++ très naturelle
- + naturelle
- 0 moyennement naturelle
- peu naturelle
- pas naturelle du tout

Veuillez entourer le signe d'un cercle.

＊ registre : langue écrite ou langue orale soutenue

また、本文中の例文の下にある次のような記述はアンケート結果を示している。

(++) bcdefgh (+) a (0) (-) (--)

例えば、インフォーマント b が (++) にマークした場合にはその枠に b と記した。また、合計 8 名のインフォーマントにアンケートを実施したが、ごくまれにインフォーマントがマークし忘れた例文があるので、インフォーマントの数が足りないことがある。

- (3) アンケートの例文はすべて下に示すような a) と b) の二つの文で一つのセットになっていたが、ここではスペースの都合で本文中のような表記にした。以下の例文についても同様である。

- x. a) La confirmation de cette nouvelle est arrivée à cinq heures.
(++) (+) (0) (-) (--)
- b) La confirmation en est arrivée à cinq heures.
(++) (+) (0) (-) (--)

- (4) Kupferman の論文については、Ruwet (1983), (1990) で言及されているが、筆者は未見である。また、この問題について彼は 1989 年に Congrès international de Linguística e Filología románica で口頭発表

をおこなっている。

- (5) (19) では du garage ではなく、de la maison となっているが、porte と garage、maison の関係は同じなので、(19) の en が du garage であってもインフォーマントの評価は変わらないものと思われる。なお、(8)、(9) と類似の文の評価は次のとおりである。

(i) La porte en(= du garage) est ouverte.

(++) dh (+) ab (0) eg (-) f (--) c

(ii) La porte en(= du garage) a été ouverte.

(++) dh (+) (0) bg (-) af (--) c

本文の (19) の評価は十分に高いので、上例の評価がそれより低いのは la porte en 以外の要素のせいである。

- (6) Ruwet (1972) で、彼は再帰的用法の代名動詞を特定するのに限定文と分裂文のテストを提案している。この方法(分裂文)で se perdre の入った文をインフォーマントにテストしてみた。

(i) Ce n'est pas lui-même que le guide a perdu dans le musée, mais les touristes.

(ii) Ce n'est pas lui-même que Jean a perdu dans le musée, mais Marie.

インフォーマントの評価は二文ともきわめて低かった。

- (7) dégoûter には、～qn de + qn/qc/inf. の構文がある。それで、主語の de NP ではなくて、動詞の補語の de NP が en 化されている可能性もある。ただし、アンケート調査は、これまでのすべての例文についても同じだが、注 3 で述べたような形でなされた。

x. Rien que l'idée de le revoir me dégoûte.

(++) (+) (0) (-) (--)

Rien que l'idée m'en dégoûte.

(++) (+) (0) (-) (--)

[参考文献]

- 荒井文雄 (1987): 「“se-moyen” 構文の意味論」, 『フランス語学研究』 21号.
 (1987): 「中立代名動詞の派生について」, 『フランス語学研究』 22号.
 Bouchard, D. (1987): “En-chain”, *Studies in Romance Linguistics*, Foris.
 Burzio, L. (1981): *Intransitive Verbs and Italian Auxiliaries*, thèse de doctorat MIT.
 Couquaux, D. (1979): “Sur la syntaxe des phrases prédictives en français”, *Linguisticæ investigationes* III-2.
 (1980): “Place de la transformation Montée dans la syntaxe du français moderne”, *Le français moderne* XLVIII-3.
 (1981): “French predication and linguistic theory”, MAY & KOSTER (eds): *Levels of Syntactic Representation*, Foris.
 Givón, T. (1984): *Syntax. A Functional-Typological Introduction*, vol. 1, J. Benjamins.
 春木仁孝 (1986): 「フランス語の中立代名動詞と非人称受け身」, 『言語文化研究』 12号.
 Hendrick, R. (1985): “The distribution of the French clitic EN and the ECP”, *Current Issues in Linguistic theory* 36.
 Hopper, P. & S. Thompson (1980): “Transitivity in Grammar and Discours”, *Language* 56.
 Morin, Y.-C. (1981): “Some Myths About Pronominal Clitics in French”, *Linguistic Analysis*, 8, 2.
 大木 充 (1990): 「名詞補語 de NP の en 化と他動性」, 『フランス文化の中心と周縁』.
 Perlmutter, D. (1987): “Impersonal Passives and Unaccusative Hypothesis”, *BLS* VI.
 Ruwet, N. (1972): *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Seuil.
 (1983): “Montée et Contrôle : Une question à revoir”, *Revue romane* 24, numéro spécial.
 (1990): “EN et Y : Deux clitiques pronominaux antilogophoriques”, *Langages* 97.

(1990. 5. 8 受理)